

町道淀原馬場線改良工事に伴う

若林遺跡調査概報

1990年3月

瑞穂町教育委員会

序

瑞穂町は遺跡の町といわれるほど多数の遺跡が点在しております。特に長尾原遺跡、順庵原遺跡、江迫横穴群等縄文・弥生期の遺物も多く発掘され、古代集落の盛衰をしのばせてくれます。

このたび、町道淀原馬場線道路改良工事に伴い若林遺跡付近の実態を調べる必要が生じたため、瑞穂町教育委員会ではこれを発掘調査いたしました。

本報告書はその調査記録ですが、埋蔵文化財資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

尚、調査に当っては瑞穂町吉川正調査員をはじめ、調査にご協力をいただいた関係各位のご理解とご支援があったことをご報告いたしますとともに、そのご苦労を謝し厚く御礼申し上げる次第であります。

瑞穂町教育委員会

教育長 澤田 隆之

目 次

1. 調査に至る経緯	3
2. 位置と環境	4
3. 調査の概要	9
4. ま と め	12

例 言

1. 本書は、平成元年度に瑞穂町教育委員会が瑞穂町土木課の依頼を受けて実施した町道淀原馬場線の道路改良工事に伴う発掘調査の概要である。
2. 調査は次のような体制で実施した。

調査主体	瑞穂町教育委員会教育長	高 橋 律 郎
事務局	〃 教育次長	井 上 薫
〃	〃 次長補佐	石 川 久 人
調査員	島根県文化財保護指導委員	吉 川 正
調査協力	島根県教育庁文化課 埋蔵文化財第四係主事	角 田 徳 幸
〃	瑞穂町土木課主任	森 岡 弘 典

3. 調査に当っては、土地所有者各位のご協力を得たほか、笹田実一氏には土地の旧状等について貴重な証言をいただいた。記して感謝の意を表したい。
4. 本書の執筆、編集は吉川正が行なった。

1. 調査に至る経緯

若林遺跡は、瑞穂町大字淀原 837 番地一帯の広い丘陵上に所在する大規模な集落跡である。

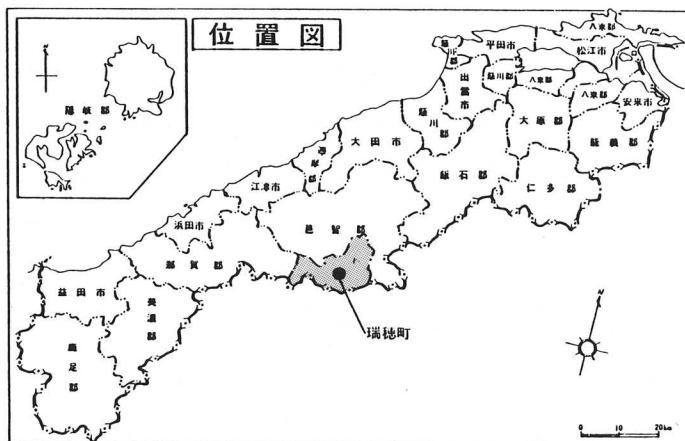
遺跡の発見は、第二次大戦後この丘陵一帯に開拓団が入植し、山林を切り開いて畠地化された際土器などの遺物が出土したことによる。しかし当時周辺の子供達により採集された遺物はその後散失し、また耕作機械の大型化による深耕と遺物の破碎により、表面に散布する遺物の量も減少し、ここが遺跡であることは長い間忘れられていたのである。

昭和46年頃町道の拡幅工事が行なわれ、その工事中この若林地内で道路崖面に土塙状の落ち込みが露出し、その中から土器1個体分が出土したと伝え聞いた筆者が現地を訪れたところ、すでに土塙状遺構は完全に破壊されていたが、出土した土器は古墳時代後期の土師器であり、丘陵一帯に少量ではあるものの弥生土器片、土師器片、須恵器片が散布していることから遺跡であることを確認したものである。

ところで、この町道淀原馬場線は、瑞穂小学校・瑞穂中学校に通う児童生徒の通学路となっているが、通行量の割に道路の幅員も狭く、交通安全上危険であることから、一部歩道の附設工事が行なわれることとなり、事業を担当する瑞穂町土木課から瑞穂町教育委員会に遺跡の取り扱いについて相談がなされたのである。

これを受けて、瑞穂町教育委員会では島根県教育委員会の指導のもとに瑞穂町土木課と協議を行い、道路改良予定地部分について発掘調査を実施することとなったものである。

第1図 遺跡位置



2. 位置と環境

広島県との県境をなす標高 600 ~ 800 m の中国山地に源を発する出羽川は、瑞穂町のほぼ中央を東流し、羽須美村口羽で江の川に合流しているが、瑞穂町地内ではその流域に狭長な沖積平地や発達した河岸段丘からなる出羽盆地を形成しており、この地域は平地の少ない石見山間部にあっては比較的恵まれた水田地帯となっている。

今回調査の対象となった若林遺跡は、この出羽盆地のほぼ中央部、出羽川右岸の発達した河岸段丘上に所在しており、前面には出羽川沖積地の広い水田が拡がる絶好の位置を占めている。

瑞穂町地内では、瑞穂町教育委員会により年次的に遺跡分布調査が行なわれていることもあって現在までに約 450 ケ所の遺跡の分布が確認されており、県内有数の遺跡分布密度の高い地域として知られている。

集落跡・散布地・古墳などの遺跡は盆地の比高 10~50 m の段丘や低丘陵上に位置するものが多く、時期的には旧石器時代から歴史時代に至るもののが知られている。

旧石器時代の遺跡としては横道遺跡や荒槻遺跡が知られている。横道遺跡は県内で最初に縄文時代早期の押型文土器を出土した遺跡として知られているが、1983年に実施された詳細分布調査の結果、始良火山灰（A T）より下層から石核、剥片が発見され、県内で初めて発掘調査による旧石器時代文化層の存在が確認されたのである。^{注1}

縄文時代の遺跡としては、前述した横道遺跡で早期の押型文土器群、前期の羽島下層式土器などが出土しているほか、この若林遺跡に隣接する長尾原遺跡^{注2}（2）地内でも少量の押型文土器が出土している。また中国横断自動車道工事に伴って調査された掘田上遺跡・郷路橋遺跡でも、早期の押型文土器群や前期の爪形文土器、後晩期の土器がまとまって出土しているなど、町内各所で縄文時代の遺跡分布が明らかになりつつある。

弥生時代に入ると牛塚原遺跡・順庵原遺跡（5）・長尾原遺跡など、出羽盆地の上・中流域で前期後半の遺跡が出現する。弥生時代の後半には前述の遺跡のほか、滑遺跡（6）・大番原遺跡・石堂遺跡など盆地の段丘面上を中心に大規模な遺跡が出現するほか、馬場ヶ谷遺跡（14）・カラス田遺跡（13）・定入遺跡など盆地周辺の山間谷頭にも小規模な遺跡がみられるようになり、当時の社会がしだいに発展していったことがうかがえる。弥生時代の後期には、こうした地域社会の発展、階級分化の結果、順庵原 1 号墳^{注5}（16）・御華山墳墓群^{注6}（17）などの共同体の首長墓が築かれている。

古墳時代に入ると盆地を中心に遺跡数はさらに増加し、遺跡規模も大きくなり、当時の社会がさらに発展したことが知られる。古墳時代の終末期から奈良時代にかけての時期には、蛇蝮遺跡（10）

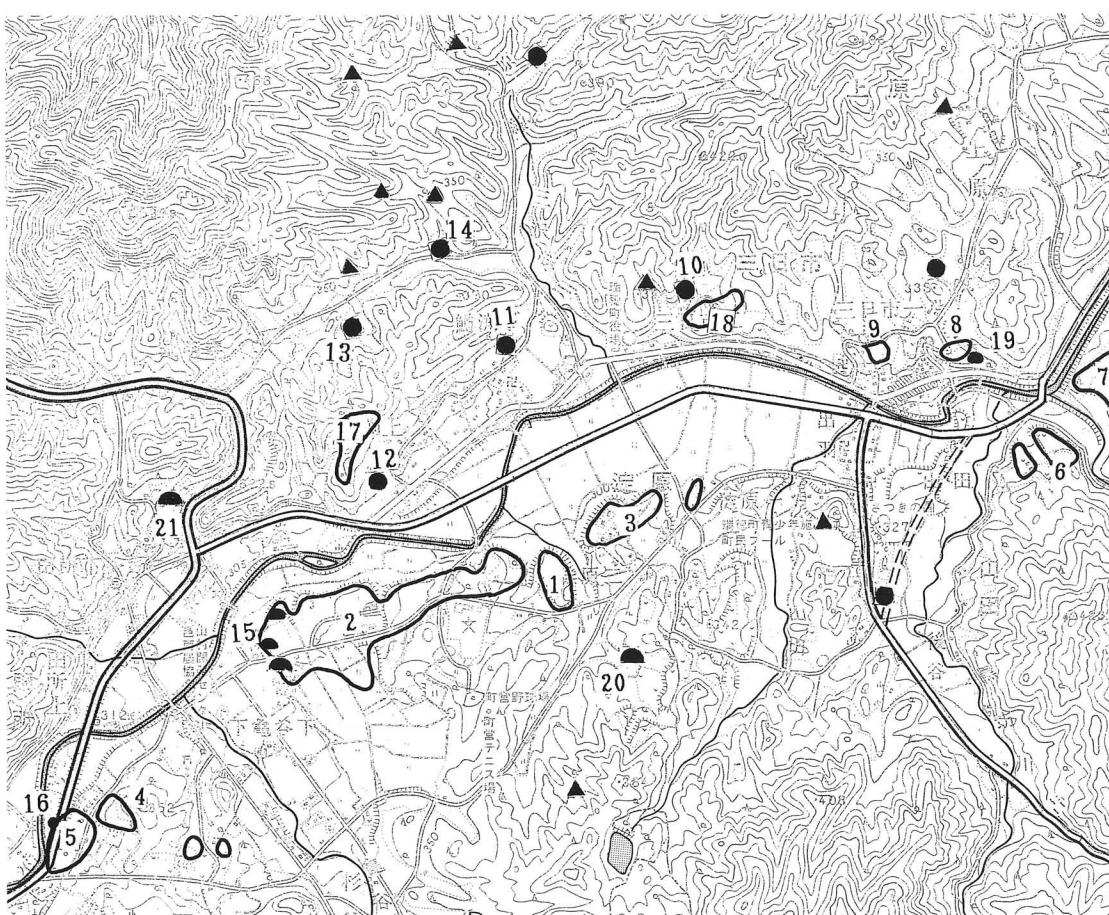
榎谷遺跡など山間の谷頭にまで遺跡が分布し、遺跡数は急激に増加するが、前代から引き続く大規模集落は遺跡規模が縮小する傾向がうかがえる。

古墳は瑞穂町内約20ヶ所で確認されている。10基程度群集するものもあるが、多くは単独で分布しており、10m前後的小規模な円墳・方墳が多い。御華山墳墓群（17）は尾根上を整形し箱式石棺を内部主体とした小規模な墳丘墓が弥生時代後期に築かれ始め、こうした墳丘墓が数基造られた後に盛土を持つ小規模な円墳が築かれており、当地方での墳墓の変遷過程をよく示している。淀田古墳群（18）は3基の方墳と4基の円墳からなる古墳群で当地方の前～中期の古墳のあり方を示す古墳群として注目されている。古墳時代後期には、杉谷古墳群、長尾原古墳群（15）など横穴式石室を内部主体とする小円墳が築造されているほか、増屋横穴（21）、江迫横穴群^{注7}（20）などの横穴墓の構築も行なわれている。

注8

また、久永古窯跡群と総称される古墳時代から平安時代にかけての須恵器窯跡も周辺の丘陵に数多く分布しており、この地域が大規模な須恵器の生産地であったことが注目されている。

第2図 周辺の遺跡分布図



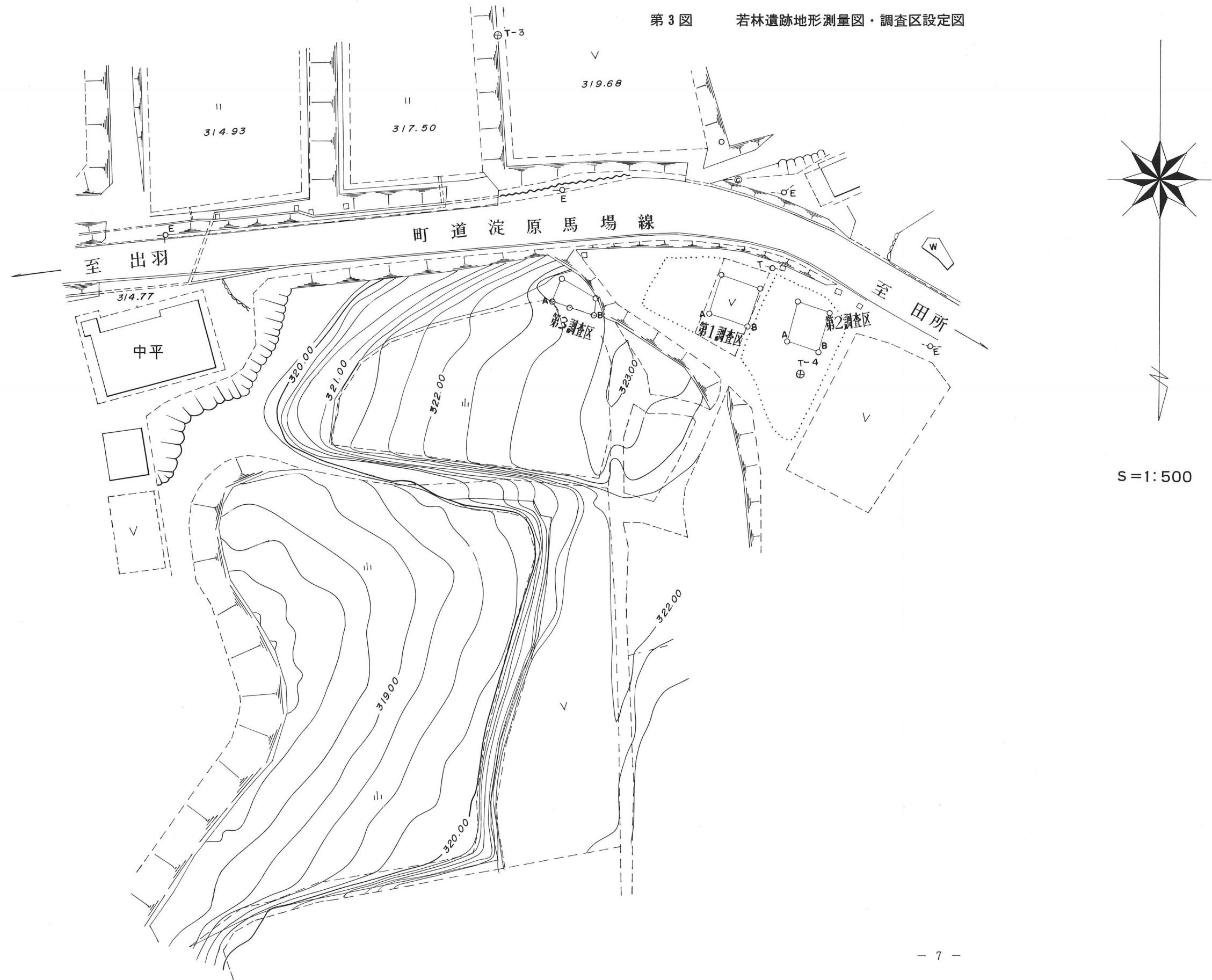
● 遺跡、散布地

▲ 古墳、横穴

▲ 須恵器窯跡

- | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|
| 1. 若林遺跡 | 2. 長尾原遺跡 | 3. 淀原遺跡 | 4. 順庵原A遺跡 |
| 5. 順庵原B遺跡 | 6. 滑遺跡 | 7. 狼原遺跡 | 8. 宮ヶ谷遺跡 |
| 9. 崇聖寺原遺跡 | 10. 蛇蝮遺跡 | 11. 原下遺跡 | 12. 竹前遺跡 |
| 13. カラス田遺跡 | 14. 馬場ヶ谷遺跡 | 15. 長尾原古墳群 | 16. 順庵原一号墳 |
| 17. 御華山墳墓群 | 18. 淀田古墳群 | 19. 七神社石箱墓群 | 20. 江迫横穴群 |
| 21. 増屋横穴 | | | |

第3図 若林遺跡地形測量図・調査区設定図



3. 調査の概要

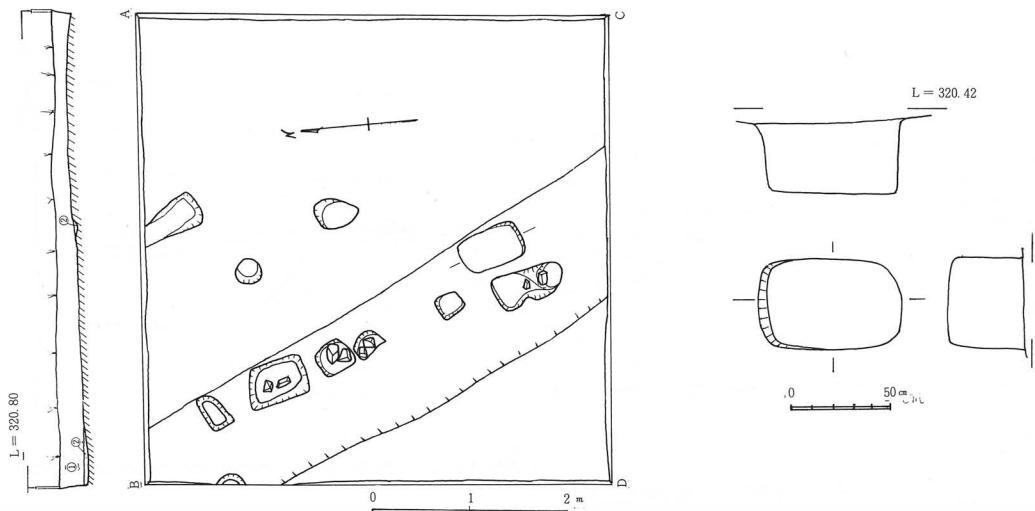
瑞穂町大字淀原に所在する若林遺跡は、出羽川によって形成された広い河岸段丘面上に位置している。この若林遺跡の東側には淀原段丘があり、西側には長尾原段丘が拡がっているが、この両側の段丘面とは小さな谷によって区画され、今回調査した場所を基点として、南側に緩やかに傾斜した舌状の丘陵を呈している。

今回調査した場所は、こうした若林丘陵の最も南側部分に当る。調査は町道淀原馬場線に沿った一段低い畑の中に2ヶ所、丘陵上の畑の中に1ヶ所の調査区を設定して行なった。（第3図参照）

第1調査区

町道に沿った畑の中に $5\text{m} \times 5\text{m}$ の調査区を設定した。ここは丘陵を高さ2m程削平し水田とされていたが、現在は水利の関係で畑として利用されている場所である。

調査の結果、耕作土の下は花崗岩の風化した真砂土と呼ばれる地山面であることが判明したが、この地山面上に南北に走る巾1.4m深さ6cm程の浅い溝状の遺構を検出した。この溝状の遺構の中には深さ8~16cmの浅い落ち込み7ヶ所が認められ、この中には数個の石や、瓦窯に使用された練瓦の入っているもの、明らかに石を抜いた痕跡を持つものと認められる。土地の古老笛田実一氏の話によると、この場所に昭和初年頃前道城家（井野氏）が建てられていたとのことであり、この溝状遺構、落ち込みは、前道城家の家の基礎であったものと推定される。前道城家が他に移転した昭和



第4図

第1調査区平面図・土塙実測図

① 耕作土 ② 暗褐色土

5～6年頃基礎の石を抜き取り、整地を行ない水田化したものと考えられる。

この建物の基礎の下方で75cm×45cm、深さ40cmの土壇を検出した。前述の基礎よりは古く、一種の墓塚であると考えられるが、詳細は不明である。

遺物としては、耕土中より土師器の細片数個のほか、建物基礎周辺で少量の陶磁器片、煙管などが出土した。この調査区は、丘陵面を大きく削り込んで削平されており、遺物包含層、遺構面は完全に破壊されているものと判断し、この調査区での調査をこの時点で打ち切った。

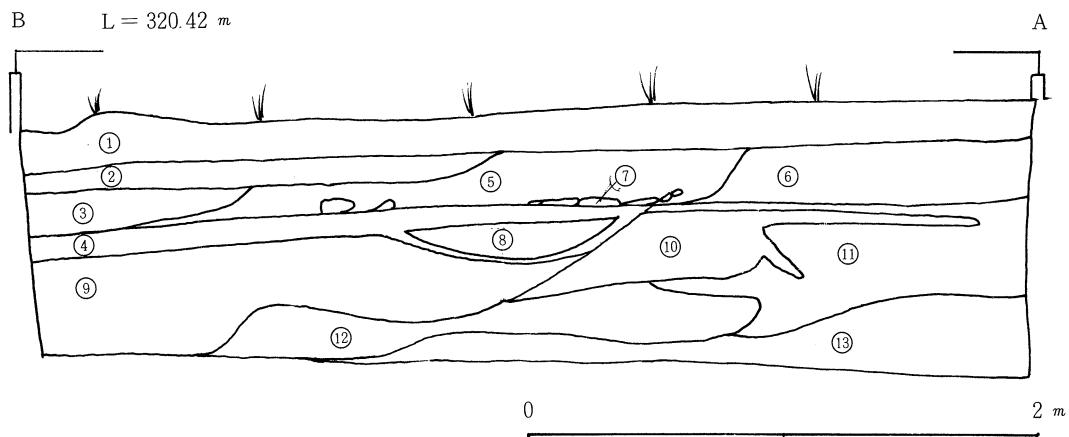
第2調査区

第1調査区の西側に設定した5m×4mの調査区である。この場所も丘陵を削り込んで削平された畠であるが、削り込みも浅く、旧表面に近いと予想した場所である。

調査の結果、耕作土の下には赤褐色土の水田基盤層が認められたが、この基盤層がやや不自然に感じられたため、念のため調査の北側部分についてさらに1m程掘り下げてみた。その結果、この基盤層はかなり複雑な堆積状況を示しており、人為的に埋められたものであることが判明した。この埋土中には陶磁器片、ガラス片などが混入しており、さらにこの地方で瓦土と呼ばれる白色粘土のブロックもかなり混入している状況であった。このことからこの調査区一帯は、この若林遺跡に隣接する板屋裏瓦窯跡の粘土の採掘場であり、遺物包含層、遺構面は完全に破壊されているものと判断し、この調査区での調査を打ち切った。遺物としては前述した陶磁器類のほか、埋土中より土師器の細片少量が出土している。

第3調査区

第1調査区上段の丘陵上の畠の一画に設定した東西5m、東辺3m、西辺2mの調査区である。



第5図 第2調査区土層断面図

- ①耕作土 ②赤褐色土 ③黄色ブロック入褐色土 ④黒色土 ⑤黄褐色土 ⑥瓦土 ⑦瓦土ブロック ⑧黄色ブロック瓦土 ⑨黄色ブロック入黒色土 ⑩瓦土 ⑪明褐色土 ⑫碳化黑色ブロック入黄色土 ⑬砂質明褐色土

約30cmの耕作土の下は明褐色粘土質の地山となっているが、本来の遺物包含層はかなり薄かったようであり、地山上面は完全に耕作土化していた。

地山上面で遺構が検出できなかったため、念のため調査区の東側部分について50cm程掘り下げてみたが、明褐色土層中からは遺構・遺物は検出できなかった。

遺物としては耕作土中より小型の石斧1・石鎌1・黒曜石片2・玉髓質の流紋岩剥片少量・縄文土器の底部片1・須恵器片・土師器片少量が出土したが、これらは瓦片・瓦窯用具・陶磁器片・ビール瓶などと共に出土しており、遺物包含層が完全に搅乱されていることを示していた。

石斧(第7図1)は長さ6.1cm、刃巾3cmの小型の磨製石斧で青味がかった片岩製である。全体に風化が進んでおり、表面の一部は剥脱している。

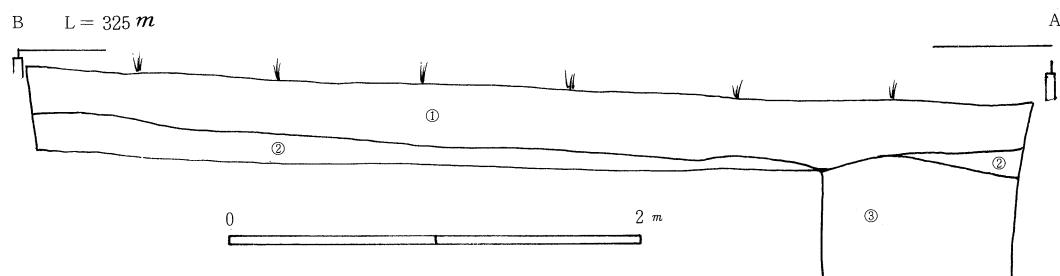
2は先端部、基部の一部を欠損した石鎌で安山岩製のものである。

3は黒色の平底土器片である。

図示はしなかったが、黒曜石片は色調から隠岐島産のものと考えられる。

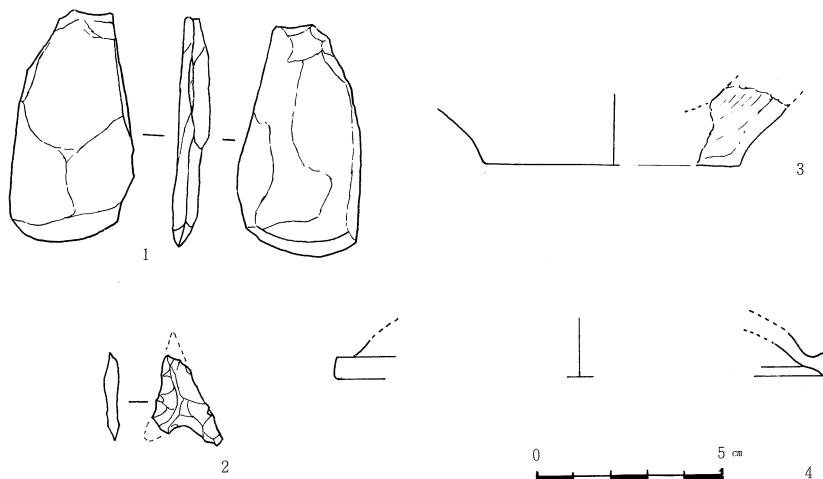
これらの石斧、石鎌、流紋岩片、黒曜石片などは、この地方の他の遺跡の例から考えて縄文時代のものである可能性が強い。3の土器片についても縄文時代のものと考える。

4は蓋壺の蓋端部で山陰の須恵器V期のものである。この地方に広く分布する久永古窯跡群で生産された須恵器の中でも新しい型式に属するものである。



第6図 第3調査区土層断面図

- ① 耕作土
- ② 暗褐色土
- ③ 明褐色土



第7図 第3調査区出土遺物実測図

4 まとめ

今回の若林遺跡の調査は、広大な若林丘陵の南端の一部を調査したのみであり、出土した遺物の量も少なくまた明確な遺構も検出することはできなかったが、若林遺跡の初現が縄文時代にまで遡ることが明らかになったことは大きな成果であるといえよう。

中国横断自動車道建設に伴う事前調査により郷路橋遺跡、堀田上遺跡、今佐屋山遺跡で縄文時代の遺構、遺物がまとまって出土し、また町道鱒渕馬の原線の改良工事に伴って調査されたロクロ谷遺跡でも縄文時代の遺物が出土するなど、近年この時代の遺跡、遺物の出土例が増加してはいるものの、この地方での縄文時代遺跡の数は限られているのが現状である。こうした中でこの若林遺跡にも縄文時代の遺跡の分布していることが明らかになったことは、今後の同時代研究に大きな意義を持つものといえる。

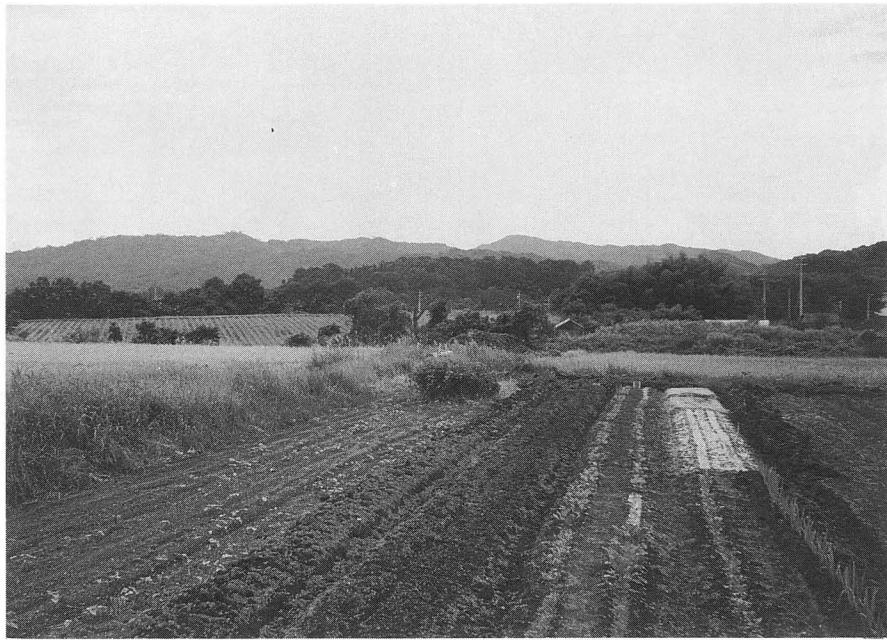
若林遺跡の中心は、地形的にみて丘陵中央から丘陵先端部にあることが予想されるが、畠地化、深耕により遺物包含層がかなり搅乱されていることも考えられる。しかし場所によっては遺物包含層がかなり良好な状態で残されているものと考えている。

ところで、この若林遺跡の西に所在する長尾原遺跡は、東西 500 m、南北 300 m の県内有数の大規模な集落跡であるが、この若林遺跡は距離的・地形的に考えても、長尾原遺跡と一体のものとしてとらえる必要があろう。

長尾原遺跡では、これまで各種の開発行為に伴い小規模な発掘調査が数回実施されており、弥生時代から古墳時代の住居跡や墳墓、古墳時代の鍛冶屋跡、中世の館跡などが検出されているほか、一部では環濠と思われる大型の溝も発見されている。さらには、この長尾原。若林遺跡の周辺には、長尾原古墳群、杉谷古墳群、江迫横穴群なども分布しており、この地域の古代社会の中心的な位置を占める遺跡である。

今後この地区での各種の開発計画が進められることが考えられるが、開発行為に伴う場当たり的な調査でなく広範囲にわたる組織的な調査を行う必要があると考える。

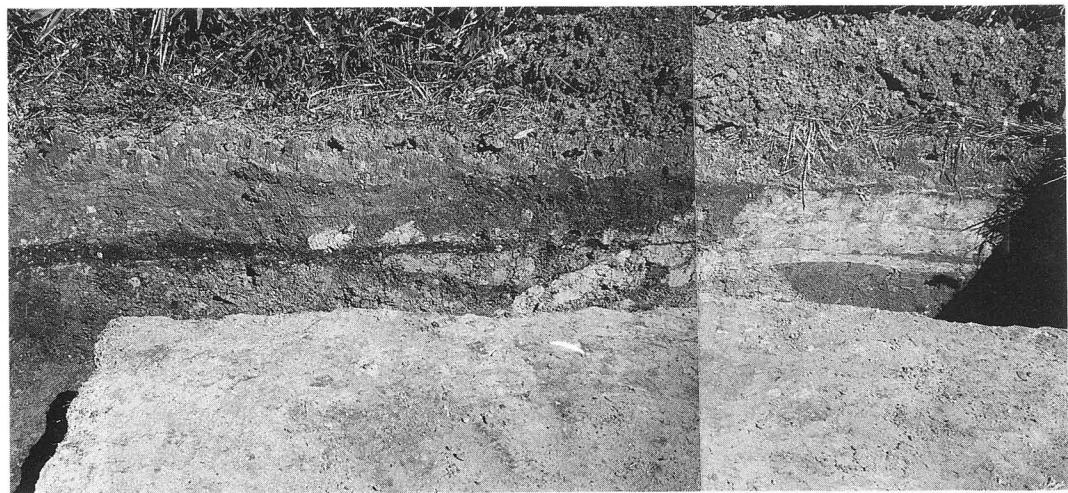
- 注 1. 河瀬正利 「横道遺跡」 1983
- 2. 門脇俊彦 「長尾原遺跡調査概報」 1969
今岡稔、吉川正「道城住居跡調査報告」 1975
- 3. 門脇俊彦 「古代史」『瑞穂町誌』2集 1966
- 4. " "
- 5. 門脇俊彦 「順庵原1号墳について」『島根県文化財調査報告7集』 1971
吉川 正 「遺跡と遺物」『瑞穂町誌』3集 1976
- 6. 門脇俊彦 「御華山弥生式墳墓調査概報」
- 7. 横山純夫、今岡稔、吉川正「江迫横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告』V集 1974
- 8. 吉川 正 「遺跡と遺物」『瑞穂町誌』3集 1976



若林遺跡全景



第1調査区 建物基礎・土塙



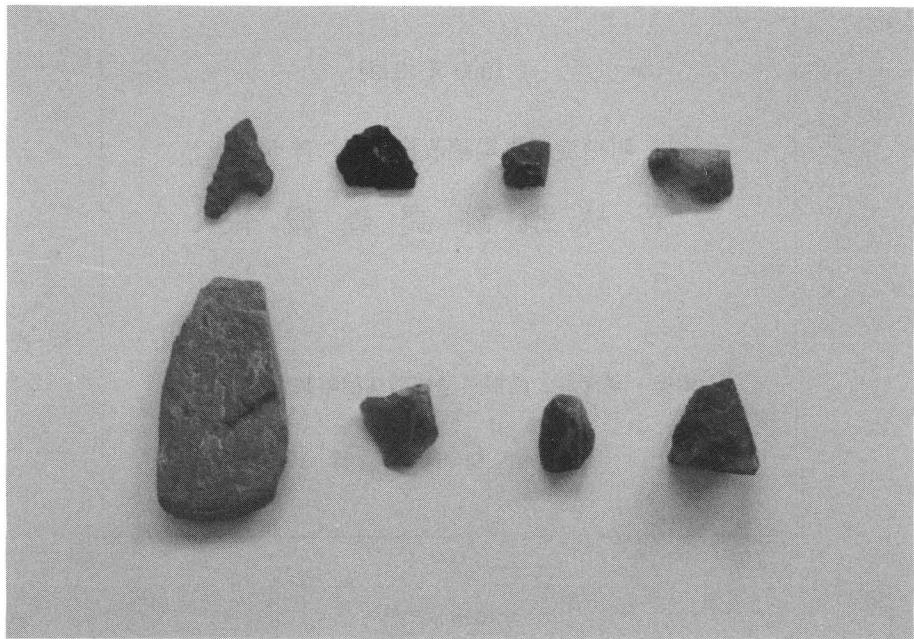
第2調査区 北側土層断面



調査風景



若林遺跡出土遺物



若林遺跡出土遺物

1990年3月

町道淀原馬場線改良工事に伴う

若林遺跡調査概報

編集・発行 島根県邑智郡瑞穂町教育委員会

印 刷 柏村印刷株式会社